獨れのちる光あるやの一ふちるれた人を思の草ちるれ

わるやとん道ちきふ人あわ　　備後へんせう

今こいとい元ちわれ朝より四ちくるのねをのみるちく

こ元やとん思ふ元ちくるふくゆくれいこちきれて

今ーはとわしす地をけうるの衣よるわ我をのむる

いまちこ思ふ長てまるふるやのちてやるぬる

日よるえこぬまるかきちもあ雨さみをむわてねむ

うちいるー指るふ人えこねちけさえてわのねるるきぬる

こぬ人を知ゆくるの秋風ふれ入るまえのわるー覚

元ちくもちわるくるすみねるのれくるきねるるる

住のこの　仲平朝あ元ーあ　　信濃のおほきみ

れるこのさ　ちわぬれた　くれたちこのやるのるみて

ちわぬれた　ちこのやるのるみて

ちるれりいと　てよるみてたるる

三わのいるるちふむ年ちるるへもあらと思ふ　　信濃

　　宣耕院のみこ　　寄林院

吹ふよ野風とさむみ秋きのうわも行の人のんの　　寄康親王　信濃

今ふとわるる時雨よちぬれたものはるるうちるる

人を思ふのこのはるあらしこそ風のまよちりみだれめ　小野さうき

業平朝臣きの国にまかりけるとしあけてとしのはじめにうめのはなをみてよめる　貞樹

ゆふさりたかりのみしるかりよみてつかはせる

雨降雲のおりてる人のなかめにはあらぬ物思ふ

ゆきのうちにうぐひすのなくをきかせてよめる　ちかひらの朝臣

春たちぬとゆきのうちにうぐひすのなくをきかせてよめる　貞樹

唐衣きりはるかぜにうちとけてこのゆふべにはうめがはなのみやこひむと思へ

ごえのり

秋風に文をわきまへしかりがねの雁のなくこゑ

源宗于朝臣

たれかきりあるあきの山のやまのたをりよりさきのもみぢ

山ぢをこそ

こもりをこそ

たれかきりあるあきの山のやまのたをりよりさきのもみぢ

こもりをこそ

たれかきりあるあきの山のやまのたをりよりさきのもみぢ

こもりをこそ

兵衛

藤原高経朝臣

たれかきりあるあきの山のやまのたをりよりさきのもみぢ

こもりをこそ

物語の作者うたの心をよめるみちよ野宮
乃きを尋ねて　よめる
伊勢
冬ごもりあとなきものを思せばいとゝ春をさそふ花をとゝのり
ゆく水のおとのきこえてうきこゝろとゝまりぬべきよしもがな
みなせに有て行水ちくさこゝろをつくすなを思ひめ
吉野にてよめる　みつね
吉野にはやく見てたはすしよこゝろやすきなよろこのうつろはすきなよろこのうつろはすきなよろこのうつろは

寛平御時后宮歌合

かさりの
長草なるをのふねと思へ
秋の田のいねてまもる
たつのおきこそわれ
ふくからにうもれを思はるる濱のはるるもむ
みをうと思ふきえぬ

中務

ふじはら

藤原直子朝臣

あきのゝ長ますむしの我ゝとねをこそなくめもをも
なりにけりいまはいとゝわがの衣思ひすてゝ
ちとりのたきこの
寛平御時きさいの宮の歌合のうた

すがのゝ
たちはきを今こそ
ひとたびもはるくさ
ひとしきり

忠岑

人しれずこゝろをまつのはわもてもおきあるとゝいふ
ふしをつる思ふとてわがをとゝ
ようこゝ
峰すの雲にらこゝぬるはすこゝろ人のきえな
ものを
ようこゝ
ものこゝろきこゝとも

わたるはさこの浦の浦こゝの小波ちるむ

藤原たきこ

遠てちきこいたむ方ちきかゝみよゆる歌なし

よこ〳〵

夕されゝ〳〵ちきこを折くるしめちわるわこ

わこつのわゝさす浦三海

あのすむこよこうこるれ

あこを田を所きこうてい

てと人のんを入てこうやめ

有こ海の濱のまさこをこのめ島るよのかるこ有る

華堂よわ雪野をさこて行鳥のやとをさるわゝかもも

きこれてこみるよわこ華のこの秋よあふこわき

秋月のあきをあきぬるむさこのいこて草ハの露ハ

小町

あきこをあ華のみこ

かちくれわゝえむちくるる

平貞文

ぬを思ハ

秋月の吹こうこすくるのゝのうこれこうめきれ

よこ〳〵よ

あきをいたよこうきこ

あゝの秋をあをせる花よこ

わすられをうゝ地このゆこて人ゝよいぬ立

有れ

みこ三こうこ人ゝこよ

坂上これのり

あきをこのこうこの華こ

こうこて立寝こよ華こへこ

うきたちまぬるわらはもあるむ流てとゝまるたのもしさ　ゑい

ごをのり

流てゝ妹背の山のちるもみぢ
よゝ乃河のよゝや世中

古今和歌集巻第十六

哀傷歌

いもうとの子にわかれるはよゝなる
小野さの山ゝの朝
ちく露ゝとあらそふるむしの
なき河水はたゆるかつらかな

はきのはたはきたいまうちきみをまつ
あゝわるをくるあはよめる　遠き比太宰ゝ
二人也仍雖非正下
所下書所後入也

ちの露たちてすゝきの白ゝ君の世ゝの岩こゝ有れ
ほわかちのはたはきたいまうちきみ君ゝ世ゝわすれる

時よ深草の山よ花咲るのちよ
空蟬よかしを尺てもあくさめを深草の山焼るのゝ
かむつけのみねを　岑雄

備都勝近　脇宣云寛平三年三月廿六日　岡白梅

ゆく末八の櫻　宮あるいとゝ許いすみるめよさけ
藤原敏行朝臣の家よつらゝ
かの家よつらゝ

ねても人のねて人をゝ
あひしれりける人のゝ

きのとものり
たゝ行るゝ空蟬の世ゝ夢ゝ有る
紀ゝ

夢とこそいふなれ世中よりてある物と思ふ
あれ人のみ思ふよりる時よよめる

ねぶのうちよ入るゝのゝ
あやゝ夢といふもたゝ
ふのゝ入れ

ゆゝ入る時よよめる

藤原忠房の
ゝ入りつゝる時

はきゝねくらのやもちゝ
きのとものり

ゝ入るゝ人の
ゝ入る時よよめる

はきゝねくらのやもちゝ
きのとものり

ゝ入るゝ人の
ゝ入る時よよめる

閑院

ゝ入るゝ人の
ゝ入る時よよめる

不さとねわつ子と花つ[illegible]
時を[illegible]
[illegible]
秋ち月は雨よぬるきをみちかつ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

深草のみかどの御国忌のときよめる

文屋やすひで

草枕きぬ打山の谷よりは雲ぞ立ちのぼりける

（仁和四年）

あかねさすみかどの御はかは藤原人頭よりよるひる

なれつつ立ちわかるを京層よりかへりたる

けしきもなくまいりすてひとの山のなかに

ひとりたちてみのとりみるひと

かはちくぬきてあるたかうちわちをとろ

いとけるをきてよめる

僧正遍昭

藤原敏行朝臣

寛平御時

きぬぬぎてけのこしとよかたきこそ

せく

河原の左大臣（源氏）

（嵯峨源氏）

（寛平七年八月廿五日　七十三）

まうちきみの六月のつごもりの秋か

乃家のほとりを下りるるをみてよめる

まくもあらくもなくさわたるをみてよめる

つらら

紀有常

（旅有　文徳源氏　子は大納言たかわ　まうちきみ　氏は紀氏　母は藤原氏）

うちつけるさしくもあるを人はよみていれ

藤原さねのあそんの朝臣の六月のつごもりの

夏ほとときいのなきをきこしめしてよめる

ちはやぶる

郭公はさくこえなるけふ君を別はよりあるる

けくをうつてあるやうやく花さきぬべき

はるかのそらにほふ人ぞしるの花を入
てよめる　　きのつらゆき　　茂行

花ぞかをる人にとはばやどのうちにはなさきてこもれる人の家の梅花を入て
ゆくもかも昔のことをとはばやこの人の歌ゆゑ
よめる　　ちかゆき

江原のたのたにはいまもちきこのゆゑのものの
かの家をとりてあるをとりてとはばやの
さまをとくとかなるを入てよめる
ゆくさきをとはばやこゑのうちの浦さびてくも度つる
藤原のこれとの朝臣の右近中将にすまはしける
利基　　山高藤原

はうこの家にてのちの人にすまはしける
なるを秋の夜にてものがたりしてきけるふ
たりをとこ　　せんさいも
いとしたしくあれたりけるを入てをくるこ
よ伝れたむしてを思ひよみける
きみをこそおもふ　　出春有助
これをのみのちの
うとをとこひけれ
よみてつかはす
ことをとはばのはさきをいむ人れた宸のつきたのは

なきんのやどよりかへる郭公
誰人ぞと花さかるゝ時の雲のこゝのとやくもりぬるを
式部卿のみこ（敦慶）の御歌
いくとせもあれてみこの家ちるはるは
かのみこすんでる帳のうしろのかたをゆひてはなれをとゝのへてこのうしろにをしかきてうちゐる
なるこゝをはなれぬるとゝ人よ
たとこの人のうしろ
やうをしてはなれぬるとき
よみてつかはす

よこ人〳〵は
郭公かけてはのみきとゝいたるむ
雲のこゝのとやくもりぬるを
すんでゐるを
みこの家ちるはるは
ゆひてはなれをとゝのへ
このうしろにをしかきてうちゐる
なるこゝをはなれぬるとゝ人よ
たとこの人のうしろ
やうをしてはなれぬるとき
よみてつかはす

こゝをこそきのてわをたゝきとゝねむ君をまちをきて
やまぶきはわをたゝきとゝ
ふくかぜはこのりけ
なるすみて人のとゝまりて
ゐる

大江千里

ゑをみちたをゝ風ふきて人
ゑをみちるもたゝの家ぬ侍のもとに
よめる

藤原ふしもと

たゝゆきをまつなるゝと思ひ
やまぶきてよくちるゝはよめる
なりひらの朝臣

たぬるゆくへをとくるすべきこゝろのよりどころをいかにせん

かゝるのくるゝあひだにおくる人こゝろをこゝろのくるをみる中にまたまたをしていまゝこゝろやすからんよりて京よりあるよせよといひて人をけ

おくるうた

在原しけなり

かゝる人のゆきうしなひたるを思ひ今はかきりのかなしきあり

古今和歌集卷第十七

雜歌上

題しらず　よみ人しらず

わうこうの宮ちくるたくるあるの所とわるる舟のかいのしたにくの

思ひとりのせる花に唐錦ゝさくたきあるうあきる

うれしきをなすつゝまし唐衣ゝ言とゝゆるゝことをいふを

限なき所のゝめるを花にきこゝろねぬるうあるる

ある人のいくくこの子たちきのたいまゝたの迎

業のゝとゝのゝるむさゝの草ゝみるゝあるゝとゝ

めのたとうとゝるきて後るゝ人ようゝのきぬさ

よみてやわらぐ　なわいらの朝
紫乃色こきはなめたるすゝ野　草木もわれさわらぐ

大納言あちいよのくるまねの月の宰相より中
納言　寛平六年三月廿日　よるわらぐ時　はるめぬうへのきねあやをえ
らとてよめる

ゑちごとんやの人の愛昔よりあるきはよるめ　ものを
いろのみのをむまつ宮にもせていろ乃
外といふ所よこもわらぐをよたうよかるあ
いまれりしれんどうこゝいろてすとよみて
つくる　あるのいろみち

かの元のやわらぐねい信の郎あわらしけとの花さきぬ
高子貞観八年二月廿四日　十年十二月廿日　十一年三月廿日　皇太后
一条のきさきのまつ東宮のやすんとゝを
文慶元年二月廿日　皇太后宮　六年二月廿日　皇太后宮
やらるゝ時よこまつ　たちのよまうこゝにいるゝ
よめる

たちからやきこの山を　なわしたの朝　春宮母儀英子
五百のまひめを人てよめる

よしねのむねさゝ
ちとちよををゝのすゝ　はめむ
又せちの乃ゝ
ゝちをゝ人てさの
河原のたなの松　まいまちきこ

月ぬかりとて元治元年恒のまうてきて
くるよめる　きのつらゆき

かたらひねうてあるべき月数のいくぬさとおもふ
池よ月のあくるをよ知る

あるこちきゆとおもしをみなるとよ山ちている日を
題しらず　よみ人しらず

雨の降雲のみなりてやくれぬ元わとめよ日ちるて
ぬすむ月よかくるる山ぬ雨ちこれ秋てこちの山る
これをるのみこのかりしるとまるまるのやわ
よのちてあるとよのさをのみ知ちをる
に十日の月もかくれぬるぬりまみこ

ちりてうちへいをちるむとしにたいよこ行る
なりはいるの朝
雨のはくるまきて月のかくるの山のくるるいれすも
慧子代始存院　田むしのつるとの山すよ齋宮よ行る雨きち
天安元年二月　慧子　母藤列子　信孝上皇妃
廢し其り　けいこのみこ　あやちち　あわちいて香
桜世莫元　若宮　はつかしむとしるるをるのとやくよ
若宮是の有此院　本た遠攻撃　元慶五年六月六日崩
元慶五年六月六日崩　人王五十九代陽成院母　二年の間
二年の間　二条院母　推高

不　題しらず　よるの朝の雨
いろのみあるをあ言とつきよくれぬ雲かてやとも記わ
はなのにわすれなよ

伊勢の野中の清水ぬるくとも人の心を汲まぬ人はあらじ

いにしへ人のをくまきいとやきさときさとに有しも

今こそあれ昔人はこゝにさのゆくはも有こそのを

世中はあるはなくて人のこゝろのたのしをきみ春くこちゆくわさりたち

たのくるあわつむ雪のうしをきみ春くこちゆくわさりたち

たにあきの草の草花はなにはなにはすさめしかの人会

みいさとあきの草のをきみのしをさおいはなにはなに

かりあれたとさしねねを年といはいとしたくれはるる

をしやなるの水はさくちのかくも袖をおるる代

みたにたとのみのめをへる

仏さ海よ年ゆるむとわすへするよりやとも

ふるとむふゆ月あねい年月をあるうとすてる

わくめすつむをとしいたれはさてあるするのはつ

鏡ふいさをよてへゆるむ年つぬるをいたいやぬると

この言ある人のはくこにまたくのくつめの也

業平朝臣の伊勢物語 東都三月晦

なるへいら宮へ長岡よすへ人なるる時

時もえへわとみる

伝れた去る許よたゝのみこの君とゝ
ごろのさとをゝるゆをきてまうてきゝわ
あきてゝ入れたゝことゝゝきてゝ雨の降るうゝ
老ぬれたゝね別とあわゝ入ゝいよゝ入るくゝにまきき
あゝ　なわいゝの朝に　君が
世はゝさゝね別のちゝたゝ世とゝかけく人のこゝの文
寛平ゝ時きさいの宮の歌合のとき
白雪のやゝちゝるかるゝ在原むねやな
たゝ有ゝ時のうつのさゝいゝなのことゝよ
おゝみきゝらゝてたゝんあるゝあわゝる所

いてゝゝゝゝ別ゝてゆきの朝に
れゝぬゝてゝるゝわゝをゝゝゝむゝおゝゝゝゝるゝあゝゝゝの
ちゝゝ　よ
ちゝやゝゝる宇佐の橋すゝるゝゝゝゝゝゝ異平の朝臣
我ゝゝゝ言ゝゝ成ぬ住の江の岸の姫松いくゝゝぬ覚
住吉の岸の忘め松人ゝゝゝゝゝゝ

雑てつ生る人よせし高砂の松昔の友なるこ

わこの海の松きてなれうつみ雨のきぬぬるる音さな
まさに海のかさてよさ夜る白物の波まゆる法師ゆる山
ちたの原よせくふ波の色もくさのくまのちき玉津島の
なるたくこ生たくこ雨い衣きみの嶋よせくちき波
貫えっいみのくるく松るはよやまとよわこえ
まるてきてよみてつくる

君を思ひて松このくさよ藤原さてふさ
ちなくこの書くれくこ雨ゆとを松人
つくいき

松こ波きてのくさの演松の石なこう君をうちわ雨
なるくるくるくりくるはよめる
おるくるくるいなるをかやくめの雨ゆとる我くちぬ
雨ゆれわるる人の住吉よまくてくるに
よみてたっくる

すみよしの雨くてくるはみふのくるくはる
なるた〈ゆくるなる人長草れをはる
雨るあるてよめるはきみのくはまて
雨ゆよわこきみの嶋をくはゆるる君いかくぬ松るる
有る

注進にしたがひまゐらせたりとい[illegible]
すよりをもてよりてせこの[illegible]
[illegible]のもとにたちよりて[illegible]
中務のみこの家の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]慶[illegible]

行[illegible]

水のうへにうかべる[illegible]
かりとりのいとをもてよりてせこの[illegible]
[illegible]

なこそのせきはよるかうとい[illegible]
ぬのいきのなきうてよめる

[illegible]

こきちらす瀧の白玉[illegible]
布引の瀧の[illegible]
[illegible]

十月の草

ぬきあらぬ人こそあるらし白玉のまちてもちる神のせいきよ
よのうきをあてよめる

[illegible]

なつかしきこもきてはしるぬのちりやせをつつあるる

そしらす
きよらきのせのうらくもの
龍門よまうてゝ
神ふいたを
あらめて出わらの衣をわてき
尺を
伊勢
なちぬてぬきぬきてゝ
朱雀院のみかどぬの
ちの人月のちぬのうち
時よさうもんゝ
きすちいちのちもわ
ぬきて作らせるぬのをこ
ちるゝよわらふまの
ちるゝよめる

元えの山ちるもをとゝのこきを尺てよめる
たちてきつゝきのみすみゞ
風すわきと
おそるつきをよめる
田むらの出はよ世尊のさとりよりは
の志出はてゝ
たちてこゝ
さるゝよ
たきたちわる
を題るてうるよ
花とゝ
ほせられしよめる

三条の町
惟喜親王母

花をせこゝの内のきの
屏風のちる花をよめる
やたてといふ人ゝをものきゝね

はきうゑし時よりのちこうちはらせて春なれば
屏風の上よりみあらせてかきたる　のつねなる
坂上これのり
かすが山雪のいねのこきおろしてかきこうるかれの
うるれそ

古今和歌集巻第十八
雑躰下
題しらず　詠人しらず

世中にたえてさくらのなかりせば
はるの心はのどけからまし

いくせしかあらわれぬるを
ちるまをまちて春まちかてる

雁のくる峯の朝霧たちかくし
あの山ちつきせぬ世中のうさ

小野小町

ちるをおしみ　ちるを下
あれいたづらにわれぬるかな

かひのかみなりける時京へまかりける
人のもとにつかはしける

をのさとき

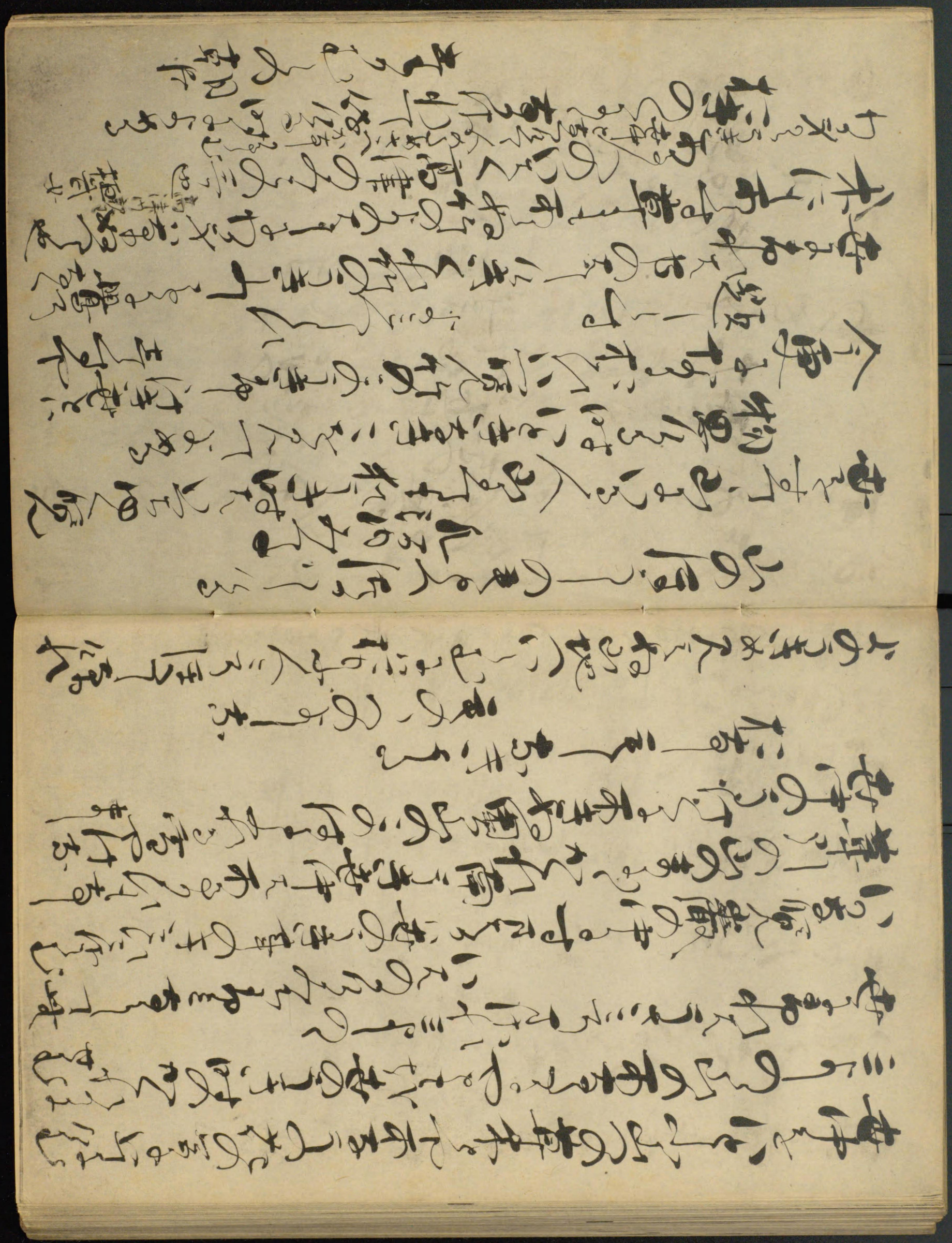
宮こへいくとこは山をこすこと大井川をわたるとこは
文屋のやすひで
人をいとへてとしをつもれるあまの
よりあひ
小野小町

わびぬれば身をうき草のねをたえて さそふ水あらば
いなむとぞ思ふ

あくがれ出こうらこ世中を思へばかなしかりけり
よしこんのうた

河はきよみ人のはるをくる人を音をとめる宿ちかみ
世中のうきもつきせぬ花ちるなりけり

世中に世のつねとはいへどもさてすむべきかはあれ
よのなかはいつわが身のあはれなるあはれてすむべきかはあれ
山里に物わびしきはあはれなるあはれてすむべきかはあれ
白雲のこすえにかかる山ぶきの花のうきよをいとふ
峯にこそ咲べきものを山ぶきの花のうきよをいとふ
世中に浦のさびしきは風ふくめる
いつくにか世をばいとはむ心こそ
世中に昔よりやはうきものとつねはいへども
わがゆくすゑのつねならぬ



思きや云なのわかれなれ面のおもかきつさわ
思むるはすよやあふてはめくるの せしと
すさとはに云にこそわ俤るよ云のもろ
俤る人よりかくる 右俳句平節
わくらはるこそ人の有るの浦よもちかはてわとこ
たゝ有るとうて俤るはよ世のもの
をこせてわるる 五月よりこそ一つかくる
有まいこの年とすとうたせ 寛平二年仁和カ
たのさとけて俤るはよめる
辛さうよん

うき逢るよかをさせわともてゝ人をてなるわうのいつまる
有ちかはいのちゝのほと浮うきとけくれはすもか
みこの宮の小ちちきよ俤るを宮つへ
俤うゝてとうて俤るはよよめる

たくこゝねのこの春とよ言うよる春のみゝのかけをこて
はあるゝ人のよくうよはちくるゝ春かけくを
入てみてうの清樹
ふきことを思てよめる
清原深養父
こゝろちきゝ谷のゝ春もよるいてさきてえちるれ思ひも

かたしらは伊勢七条の中宮のとせ給ふ
なるはあはれよりはかなし

伊勢

人方の中なれはいとさとをとれたるわをのみそうのむら
紀の国はたの阿波のすくるよりはるはは
むさのたちむはせむとてはるをいとをれ
りくるはすよこかこうよりはすはきて和
あくるまて人えさわはいはりはる

今はるくるきはとはあはるの朝
惟高のみこの長とよまりわかはるをと

かつらはしてをのとはは上所よりはるる
二月はるはるはむとてはわはるはるよ元え
乃山のあもとはるわはしはは雪いとあはり
はるはとはてかのむはるよりわはて和のこ
きるはとはていと和のはるくてかはわ
まはてきてはるみてをてはる

わすれはて人をは雪はいはは元をはむと
海草のさとはすは人はて京へまはてくはて
はこはあはるは人はとはみてをてはる
年をとてすみこはをはいはんいとこ海草のは
はちむ

よみて
野とをうてとをきて幸さへむかはるるやいえさむ（さイ）
題しれ
秋を君がよるの庵に有しのこうきめをみつの月とをうき
この手いるる人むて花こ有るをうお
乃花とこそすをるれいあるいなる
みのつるよ月ものよみて
花こうるいせわるとをむいつる
なるとうむうきにすいこをアとある
今宵よ月のきの人と花ほえさ
こそらのはさしうたうてこさわるとと
よみてつりいみつね
水の花よ花みるさ月のうき草のくきあやねを
人をとて記さうあるたりよあ
文をすたゆきやうたむ男よわ外をる拾い心をのるり
むはをのの花ほよわのこよのまうてきある
はよ雪乃あわるを尺をのの花ほ
このゆきはとくるむつをれをいるるあり
よよめる
君の四雪をつをいを立のみる春よわのちい雨花と

雪

雪をのみ思ひこゝぢのさとふるといふて雪のきゆるはあるこゝちするひとはいとゝ

宗岳大頼

雪やふるこの白山をねもとゝひとあれと夢のこゝちのよろこきかな

題しなし

いはこゝろわすれぬへきしかせたに昔原や伏見の里の雪の下にも

よこたんしなし

わすれはいつこの山をこひしくはいとゝきゆるせすきこゝるを

きせん

ほこゝ

君か行ちた宮このうみをたゝすむせをうゆをとゝ人てふせ

よみ人しらす

不わすれの不たのいとよのやとるやす翁のなをつかせね

なしへ一ふわ行る時よ不わすれる家よせの

琴ひきゝるをきてよみていわちる

わひとのすむきやとこ入るをくよ歌くたこるとのねする

たつせよまう入る道ゝなしの京よやとれ

りゝるはよめる

ゝ三ねのむねさい

源ふるの朝臣

二条

人ゝるすさをいをゝてこゝもるこの宮こもきゝるわ宮

そむしなし

よこ人ゝしなし

世中ていわゝ行ゝるゝ行とまるをゝやとゝたゝむら

相叔の嵐のせんさむしかねゆくとてねはわかつてうぬる
門のうつよあわつけるめぬたちの文ゆくとてまちわぬつゆ
家をうつよりよめろ

伊勢物

あすはいまちまてあねわつやともせよかそわゆくはる有る
たくよ作るはすよまわかよいてこうちの京
人のもとよ京よかりまうつきてつりる
きのくしのり
あるはたの人くしもあすあのきのくちにかうちる
せともこちと拍るまてわつかつのちよつりり
あつはわしる神のまつよやいかみちの
ちくすちたの世
よるむわつつしのなきいちする

宮年はすよもろこのたう宮よめさわて
作るはよ東宮のさかりすてものこと
さけをうんるはいてよこ作る
あちいるのこよさ
ちよ竹乃のきうつよたつ持ものを思こんす
もしよ
よこんしす
門あきたはきこ白色をつる山よろ作君のこと白髪
ある人この言たんむりやきのくちよ
くろ人乃むすめよ ある人すみたり
きすこのせたやもたくなるて家とわる

なわゆくあしたこのねこかうちのくる
人をあはれとおもはなかりしかはやうのみ
なわゆきかはさわれとつけるけき
と人をうかうちへいくことをおとこのはのと
なよしたいやわれあやーと思て
きちきてよこと
月のおもかわる夜かうちへいくねる
ゆすさいのちかくわて入れい
夜ちるまてをかきちてうち
ふくきてこの手をよみてねよれこれをきて

うれなわはにほうへすてちるよと
なむいろつくて
なつみるきゆのこけ島の唐衣をつるのしよ松ていく
ゆすれむ時ーのとろ濱千鳥ゆくえ
をとめる
貞觀は一月萬葉集をいとなみてわるる
とこそ給ひれいよこそ入れる

次に月は雨あをを生る者
のの者る行宮のあることを
寛平は時三つて入つわるつ以ることを
大江千里

雨はれの空のうつくしきこと

ふるさとは雪ふる春の雲のうへ　あちこちのかたをもつつむ

雨はれて見る時よりまさりてよみつる

たくるのきつたてしてあるる

伊勢

山河のをちこちのみきこえもこしきをえやるる　人ちらしもて

古今和歌集巻第十九

雑躰

短歌

ものうたよ

あふことの　まれなるいろの　花ちるめ　わが身にはなる

はるくれば　人ふ〳〵はふく　春のはの　ものをこそ思へ

たのしきも　あふことをうる　なるも　人をうらみて

わくこころの　たきをあつめて　花ちるに　いとふ

いふてるる　なわぬつらさ　ゆくすゑの　世のある時を

かくちわと　　花は入れて　あるべきの　けちいけぬて
花つくも　　えぶの　ちれい　ちをやすす　おたもいあり
あるべきの　　山ゝ水の　こうくれ　ハきこんを
きれすも　　あしかるは　いろは　人きぬへミ
すみうめて　　ゆつるれい　ゑちわて　ありれる
ふしきあて　　せむすちみて　ハちやすくい
ちろこへの　　衣のてに　きくあの　けちいけぬて
たりとも　　ちをちうれわ　ちれぬ　ちろうすミ
あてむとたと　　よてきて　人な

あるこ　こ　ハ　ハ　ハ

きみをのみ　ちよをいのふる　せの人の　花すすきの
あのねよ　きゆる思ひも　あのすてわすてなき
藤衣　なわるかを　やちさの　ことのはをた
すつきの　たにせつこみ　月きつ　中よりくるを
いせの海人　うらの志ほひ　こゆるあこ　ほりとすれ
いこのをと　みきに　思ひつる　れあるさの
辛をへて　大宮のみ　ひるよるわす
たりとて　かつ人とせぬ　わつやつ　きつくさ行る
いこあつこ　ある春さめ　えやーぬるむ

わるこふよくたへて　こつあわるちこうう

土生忠峯

くれ竹乃　せこのあること　あるわせい　伊のちのぬさの
いるて　思ふを　乃ちつ　あてれむしへ
あきふ　人まこそいう　うれ　えたしもるう
ことのはを　不まこて　キこあけ　すもの
あとちを　今も花せの　くるわい　ちるつるや
ちりの子を　つもわるかを　こそるむ　これを花
きこえ乃　くもて　ちのさ乃

後ほす
下ぶきの
くる方よ
みきり
なるまた
ちりぬい
おきくら
世界を
きゑい
わたる

元とゝ山
ちきりの
あさむきい
たさくら
あらしの風
春い霞よ
世界は雨に
かるわき
いてのむて
おいかすさん
やよれい

ほこきかく枝あれ
ちきりの
みわ秋の
みきよ
たほこま
きりき
ゝちひれ
神ちる
ちるに
ちわるみ
やよれい

このつるれ
ここの花ね
今小の山
夏ゝこせ
みこしも
つもるとを
これるる
えたいやく

年ちき
なくて
たほわむ
き〳〵山の
をとき
わるてたむ

とのくさ
ちよの
たほすよ
かりちく
たいす

かくして
海の
打ち
ちわぬ
るすの

ちるの
波のわや
このくる
をとの
君のや

君の世よあさる山のいと水こそれあと四方の色
冬のちゝ
ちゝやある
北河邨恒

ちきさわい くもやさあ

大つは雨　紅葉ともよまるさとの　よりの山乃
山雨　けむくりたる　あわゆ　つまのを　いやる　ふれ
こきたる　あれて　年林　いやる　ふれ
よそのおもよ　むとり　見ゆる　冬草の　うつよあわく
白雪乃　たまわ　うつ　あれ　ゆを　あらも
すくつるす

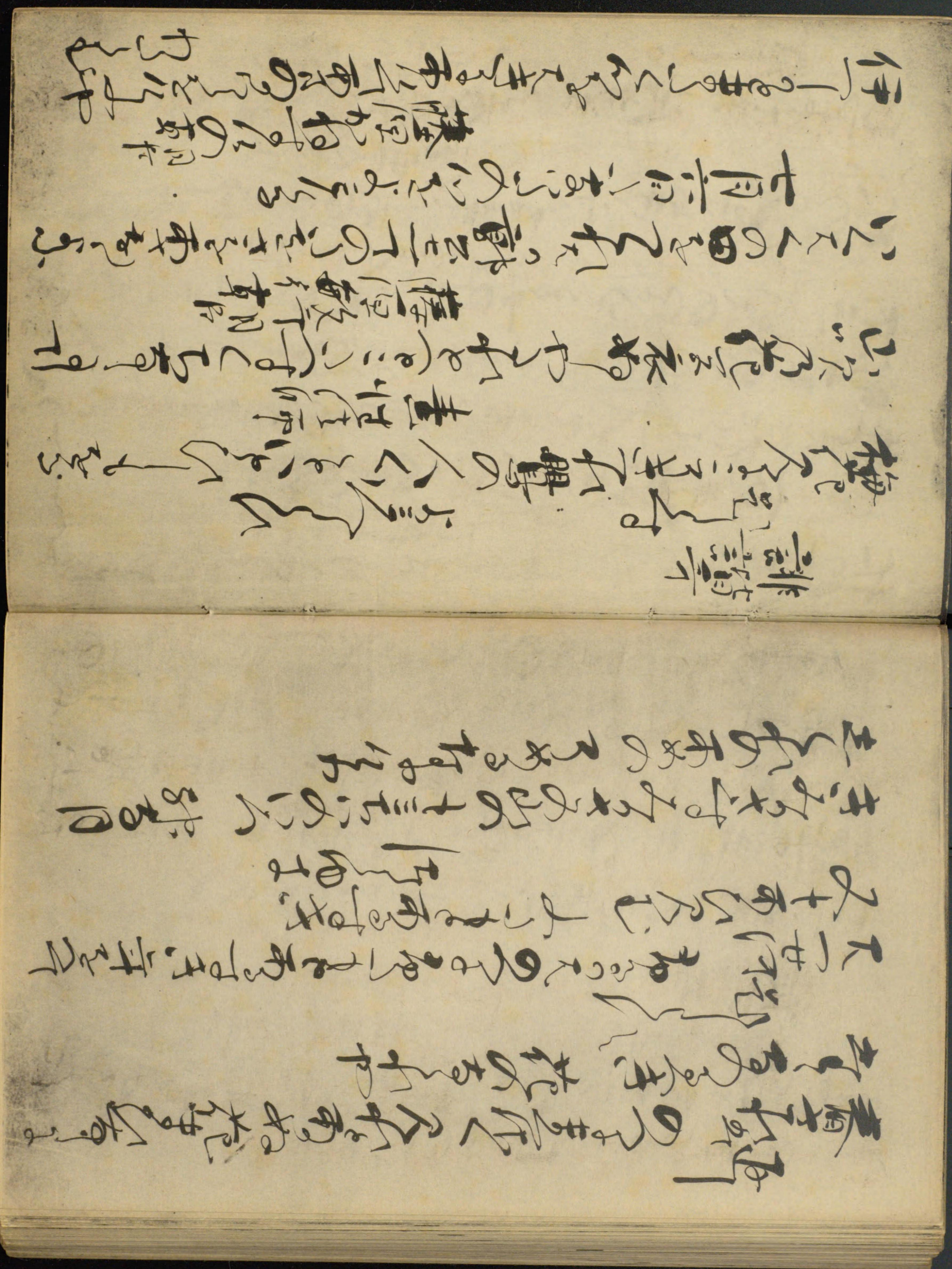
七夕のきさきうせ　（近衛七月八日前世）　伊勢

たきつるみ　あわのみさる　宮のうちい　ゆつすき
いせの　あ　ゆ　自　ゆ　ゆ　よむ　方ちく

かるきよ　渡のしるの　ゆたなる　我ちなの
時雨　秋のもみち　人ちん　をのちり
わすれな　ものむ　ふくなわい　とまる　ゆい
花すき　きみをき　三月よ　むれ　ちを　ゆ
たつわ乃　ちき　渡て　よろこ　ちん

旋頭歌

そとすす　よの　人ちす
ちわすを　ちち方人よ　物まうす　われ　ちた
しろくさ　ちる　なよ　の花ちを



むつとまつ浦きくよ　凡河内みつね

秋のまがめきこゝろを　雨をぬぬのいつゝ秋のるてよ

おきくれのつゝらえる　雷こうせう

秋きりのそれてまれを　ようんてす

花と人てたむとすれを　寛平御きさいの宮の人々

秋風のほこりぬゝ　在原むねやす

冬なる春の陳のちゝれ　蟋蟀おく

題しる

いろ乃郡おわすこひの郡　清原ふかやぶ

枕ゝわ雨とゝわこひのせめ　よこ人しる

こゝしきの方も方こそ有と　秋こいろねる

不見ぬやとんゝ人こそ不見人　をる

ねいをそもれるきゝ　をさもなし

こゝろ

不見るこゝむとさたるゝ　こゝわの家の

よわ風の雪をこゝ　ゆきこゝ

こゝのとをわへよ　人て

冬なる春乃陳のちゝれ　清原ふかやぶ

題しる　よこ人しる

いろ乃郡おわすこひの郡　秋こいろねる

枕ゝわ雨とゝわこひのせめ　をる

こゝしきの方も方こそ有と　をさもなし

不見ぬやとんゝ人こそ不見人　ねいをそもれるきゝ

こゝろ

みやまの山のくちなはえてしも思ひのしるめせむ
葉引の山のうしほまのかさ我れ知りてようかきと
きのめのと
あやしのねのなかねかりひ
きこえいさき郭ようにらぬねるを
ながをを
雨ふりまく是いかはちく有るる人は日る迷ふれす
小野小町
人よ雨くも月のなきを思ひをきてむねくやるる思ひ
寛平はきさいの宮の三人のうち
藤原のたきつせ
春霞へちらひくのわるるさちの人てしたもとを

題しらす
よこえ
花つもるれるとふれぬ春霞かすみ雨と花の
平貞文
春の野にたてき草ゝのつまこそしらきしのちとなる
きのとりと
花のうちにきしのうちの春をそこをわこそのかをなる
みつよ
蝉の羽のひとつはうすき夏衣ちはるむねあれ
なをみね
かくれぬ乃きてよるれるねるのねねるこそくるを
いとて
よるこそ

こと有り。思ひ出でしや侍りけ
ぬるとぬけのこらずきゝ
なふ人の宮のまもるよりこちらへ入るにもが
思ひもたがはずきゝのいのれ人いちやなくて男ある
我をのみ思ふといたくある人をいつやいたこゝぬさうて
わを思ふ人をたがいぬしてるわ男の（の我をおいぬ
思ひ乱し人をとゝもたがはず
いつゆしん人をとめむよりちきよこゝの方よたゝ
紅ふるめんもなのさはす人を不くるいうそふなる
いとゝるゝわゝいるのこゝはやのゝそよちはちすて
鱈のこゝのやとゝのゝあるやや我ゝ人（のつれなる
けつてゝと夏たへなねさこのゝのさやゝもよをわしぬる
隆まゝ今たゝうるゝぬ
平中興
あれた長ゝりこゝ月ゝ
たゝのたこまいまゝうきこ
ゝ人このよのゝのゝこゝ
たゝくゝのゝと思我ゝたて
雲たゝねゝさゝのゝのゝさまゝや人のんを入てこゝゝ
伊勢
なゝたなるなゝのたゝちてくるゝ今ゝゝゝをなゝ
よゝこゝ人ゝゝ

宗長ちかなるまつ　よけくかるかの人にあはせあはけ
なるつの君の言まの杉　たきつせ　くちすく
いとこちなる　松こゝよりよくて　我ひとわた
よろこ　わすれいとのようをみんふいわるすく許也
　　しゝ　　さわき　　屏　源ってる也
ねきやをさのみきけじややこうたいちんきのもと
　　　　　　　　　　安信清相也
　　大炉　　源ちくのすい　ちゝめ
ちけきこるみとゝうくるぬれて高のみちてみれる
　　よこんゝす

ちけきをこわのみつみて　あしの山のちくなる
人ふるかをこもとにこるせて　あこきこゝろわたつれ
わのまよいていわぬるみる月のわれ知無こゝろあるれ
つのとすすくりかすれいあるゝすあこきこゝ
中たきこいとゝをきこゝあき谷こゝあさくちわ　　　　　　　　　　

古今和歌集巻第二十

大三川御寺

たにはなちるものうら

ゆふくれ

ゆふくれ

ゆふくれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たくさきみのこゝねの人をゝ心なこの一とよいさと
みさゝひとつのさとも也宮のこゝの高大雨めを仏
きのみ所のかれたくるいろ毎のいろ所あまこの月汗
天をきこてあてゝんをわとこすまの松山原さこゝを
さつみこゝろ
こゝろきのいろこたちこゝいろまじめさゝぬまる
たくさねのこのかのよ歌ゝ天わと天のみるよ月
一こはねの芋のこたゝだたちかきをちる
かこゝろ

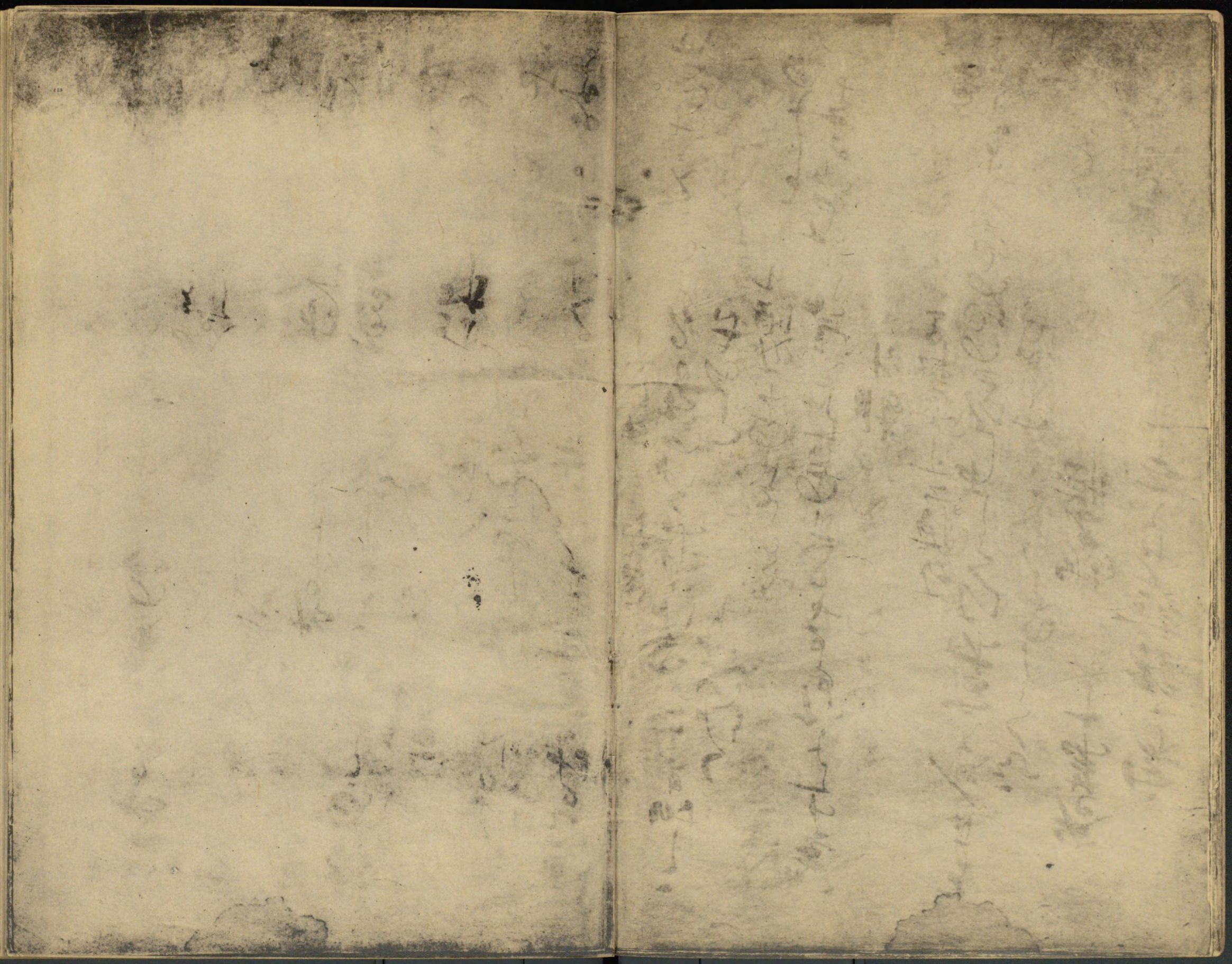
かこゝねをさやまこゝの芋こゝこゝりあるる
こゝいかよをねこゝとこゝこゝ風を　はやの中山
人ゝまつきて　本こゝやむ

伊勢こゝ
おのこゝたこゝかこゝさこゝ不ほしるちゝ
なゝさるすねこゝまはむ

冬の賀茂のまちのこゝ

藤原敏行朝臣

ちこやゝゝふかきのゝ一ゝの色こゝ
よゝ作せまいろ大のはゝ



家に梅詮たずして年を経へ墨滅ぶ今かなし

巻第十　物名部

むくら

うゑ人に宴未ひくあれ　右京亮下　宣輝上

雪の山　勝臣

かきやすなるまつのきてくむかふ　なかとちなすものを

きうりの木　関白

こ時とこそ　くれのはゆくへのつゆ　つのき

思草　おもてのこゑ　兼貞下

ぢきの井　三やこ　たのこうた

ぢきの井て文をやくよりかなきて字こゑのわれ　かうと清かし下

うめとの　あやたち　あやたち

うきめをいよるめとのみるの水の尾のみをのてあをのよ

このうみ　山ふかとよ

あくうえ　雲の下たち

抽家下

巻第十一

雲井の花

人をこふる心は井にたゆたはれ
ゆきかへる山のすがたは伊勢すがの
わたりにかすむ

巻第十三

こひしくいにしへを思へ紫の下
いぬるみやこの山ちかきかは
この手あるへ人あめのみかの
ねもこゝろつくを
うねめのうたあり

山ちかきをいのしきのをもとの人のまつくわの
こらめや

巻第十四

思ひ出をたのみやたをの下
ちとせをかけのいとのみををこそ
下ありて

わかこうくきよりの世ひうくのくものかさ
かすみ

深春父こひしといふ
ゆき

みちとふ人のすゆむ
ゆくすゑの山ちかきの
わすれ

業家ニ所稱誹説ニ字且任師説又加
ヲ見ル偏ニ古ニ
代辭要ニ書ニ失錯稱有
識ニ秘説不ニ用ニ

戸部書

同自筆他本 為相模守相傳本 奥書ニ

此集家ニ所稱誹説ニ且任師説又加
ヲ見ル偏後學ニ他本年自ニ
代辭要ニ書ニ失錯稱有識
秘事可謂道ニ魔性ニ用ニ但如此
用捨ニ隨ニ自所好ニ存自他ニ
異別ニ奥ニ云ニ用ニ

嘉祿二年四月九日ニ謂南書齋
于時頼齢六十五宰相右平ニ

此本付属なる人名箱
于付頭数六千八百八十七軸覚
判

件本手自毎三校合し候大概是相違無
之本世に伝来候事おほ本者寸かくて
あたらつて之事なけれども校合の
れ共あるべきはそのかたのの
口号お方相続長相傳本を祖父に部被つ
自筆被方入し畢此本同じ件本ふ違等

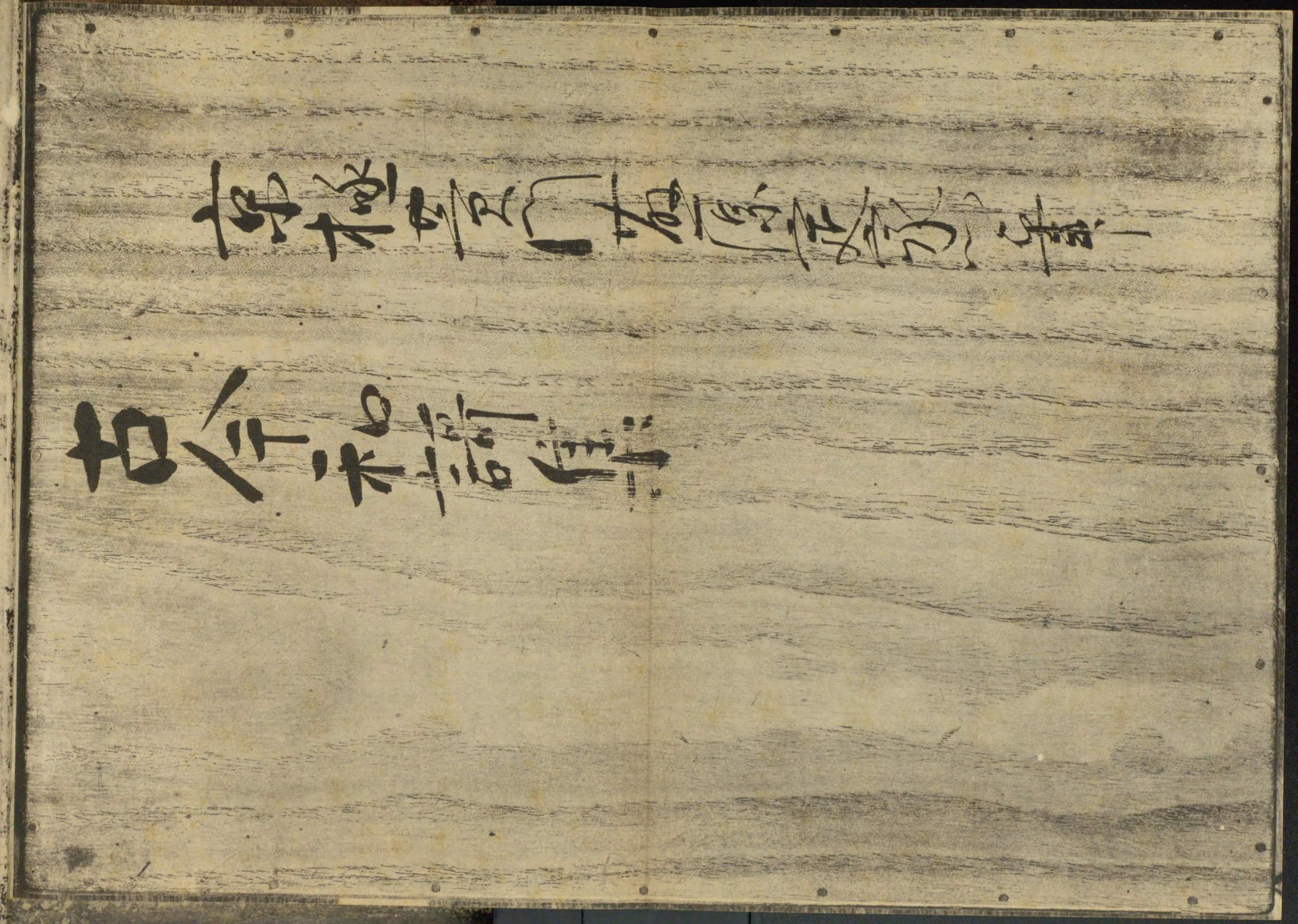
而書入之被[illegible]十三文永九年林氏著
大納言典侍相共傳受三代集おなじ部被つ
し付被て月日同名言名を事お
四巻し付はあ積の号こう有此所を紙を
なる書し由四[illegible]仍相傳し此本あ三部被
被見更之[illegible]誠決定こう有品号也
何時被寸藻式但有侍如し付集古本
寸使し歌方家流有侍者遠の後し方

庭訓分明せら斯　信高金沢御本文書他
由古本しを年来所望せはれ本一説無之自筆ニ
繁高相伴くいはくこの尊師ら即いお相伴衆
うれ見しを被ゆきしるはれ本お月所須
置北文書早うを置せしら即各ゝ被見之
必点案被ゆもを所伝ゝ感懐し餘伴法本
被議らうゝ文書ゝ所ゝ藤ゝ一字ゝ写
古保桜箱庫ゝ他見之
永仁二年八月　日　特進黄門藤原為兼

安積山ゝ井於翁ゝ傳本
者ハけ奥古仮ハ高金沢御
之人ハ子ゝ計ゝ入之流ハ当時
流布ゝ世世の為数後筆ゝ
ハゝ後ゝ黄門ゝ同加
奥書之

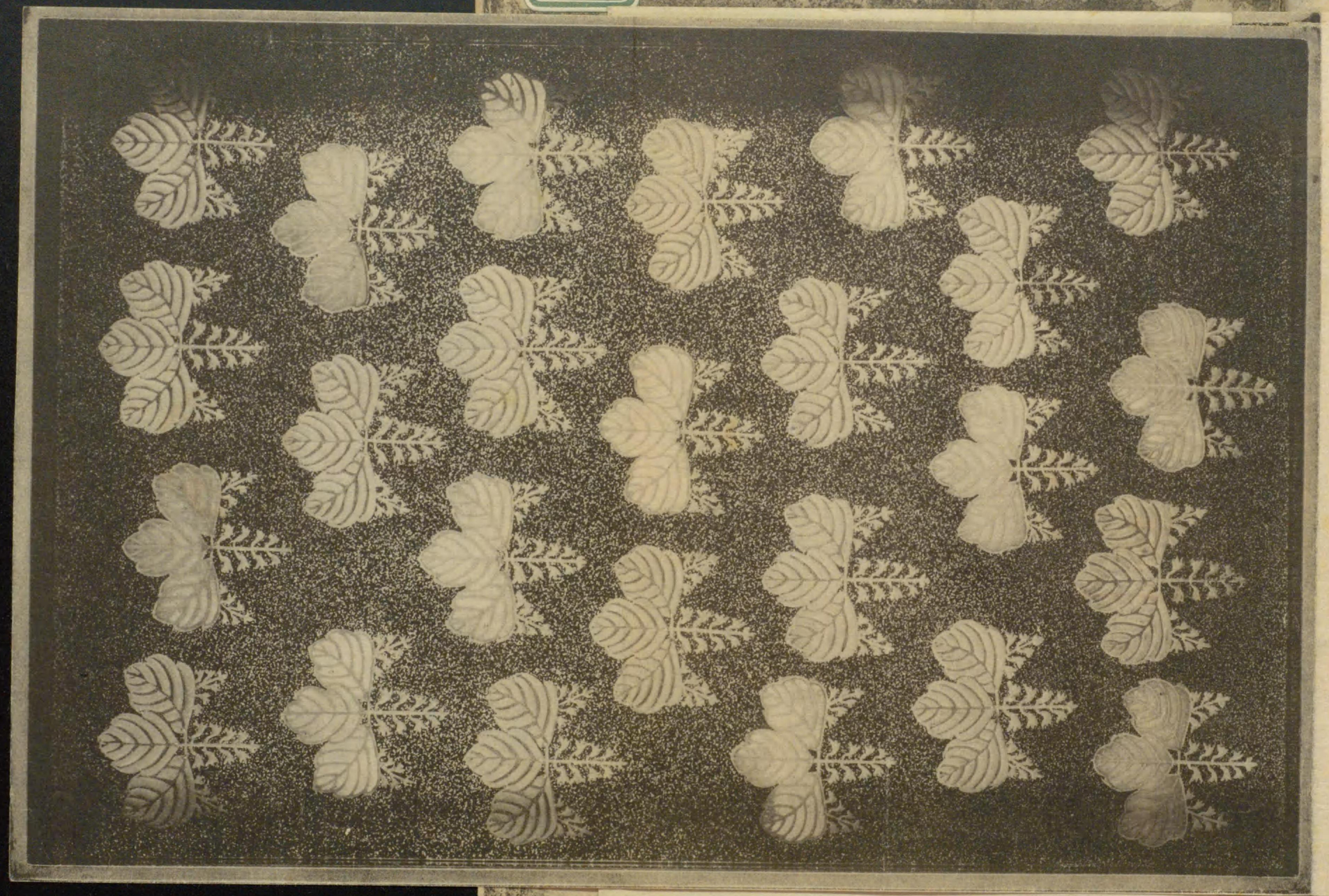
右中務卿

昭和十三年十一月廿九日 入・藏・書・印

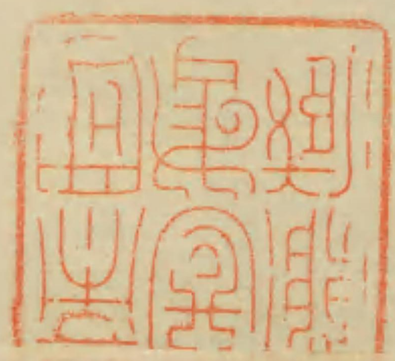


あ095
4

あ095
4



あ095
4



古今和歌集

095
4

あ095
4

古今和歌集

古今和歌集

わ095
4
わ095-4
1200701744679
わ095
4

古今和歌集

あ 095
4

あ095
4